

## アンチワーク（反労働）の質的研究に向けて

渡辺 ミルバ（東京大学大学院）

### 発表要旨：

現代社会において、多くの人の生活は資本主義によって縛られている。生活を営み、商品を買うためには、お金を得る必要があり、そのために仕事をし、さらに、会社がお金を得るために「コスト削減」という形で非正規社員になったり、リストラされたりする<sup>1</sup>。ベンジャミン・フランクリンが語ったように、「時間は貨幣 (Time is money)」であり、お金に換算されるのが現代社会の「普通」である。しかし、このような資本主義的労働に、全ての者は文句なく従事するわけではない。本発表では、資本主義の核にある労働規範（働かなければならない）への対抗、賃金労働のオルタナティブを検討する。

労働規範への抵抗が国際的にみられる。ここには、経済的要因——雇用の質の低下——、政治的要因——反グローバリズム運動など——、経営的要因——無意味な仕事の増加——、あるいは環境的要因——環境負荷の高い資本主義への異議申し立て——などが挙げられる。これを「反労働アクティビズム」と呼ぶとすれば、それはいかなる価値観の基づくのか。

労働規範への抵抗に関わる質的研究として、三つの方向の先行研究がある。第一に、失業や貧困に関わる研究である。社会的に不安定な階級であるプレカリアートが増加する中、そうした状況に抵抗する社会運動の研究がされてきた<sup>2</sup>。例えば、世界金融危機後の「反貧困運動」についての研究が蓄積されてきた<sup>3</sup>。第二に、「社会的排除」の観点からは、プレカリアートは経済的に困窮するだけでなく、スティグマなどによって社会的関係からも排除される<sup>4</sup>。そうした社会的排除による「生きづらさ」についての研究が蓄積されてきた。日本では「引きこもり」や「ニート」の経験の研究も蓄積されてきた<sup>5</sup>。第三に、労働規範を拒絶するために、労働の条件を改善させようとする社会運動への研究が蓄積されてきた。例えば、労働と生活を分離して生存を確保する政策としての「ベーシック・インカム」をめぐる運動やフリーター労組の運動などが研究されてきた<sup>6</sup>。

しかし、先行研究は労働を拒絶する「反労働」の運動そのものをあまり扱ってこなかった。労働規範の批判という観点からすれば、従来の賃金労働をそもそも拒否し、それとは異なるオルタナティブな生活を積極的に営もうとする運動について検討することがきわめて重要である。実際、コミュニケーション運動、エコ・ヴィレッジ運動、日本の「だめ連」や中国の「寝そべり主義」など、そうしたオルタナティブな運動が広範にみられる。本研究は、労働そのものに対するオルタナティブな経験を有する対象者をインタビューすることで、労働規範を批判するアクティビズムの意味を質的に明確化しようとする。

1. 渡辺（2012）。『愛とユーモアの社会運動論 一末期資本主義を生きるために一』北大路書房。
2. Standing, G. (2011). *The precariat: The new dangerous class*. Bloomsbury Academic.
3. 山本薫子 (2020). 「貧困をめぐる社会運動」長谷川公一（編）『社会運動の現在』有斐閣, 253-276.
4. 岩田正美 (2008). 『社会的排除』有斐閣.
5. 石川良子 (2007). 『ひきこもりの〈ゴール〉』青弓社.
6. 橋口昌治 (2011). 『若者の労働運動』生活書院.